

運命譚をめぐつて

—中国の事例を中心にして—

鈴木健之

はじめに

関敬吾氏の論文「運命譚——その系統と分布」は関氏最晩年の大作である。運命譚とは、関氏の言辞を借りれば、「子供の誕生の際に三柱の産神があらわれ、その子供の死の原因と時、婚姻、貧富、禍福などの生涯を予言する。当事者がこれを回避しようとしてあらゆる方法を講じてもいざれも失敗に帰し、神々の予言は必ず実現するものである」ということを主題とした一連のものがたりである」(関七八)。要するに、人の死や寿命、禍福、夫婦の縁、王位繼承、家督相続などが予め定められた運命通りになると語る話群の謂いであり、その本来の主題は運命の不可避性である。本稿ではそれら諸々のタイプの中から『グリム昔話集』第二十九話「金の髪の毛が三本ある鬼」でよく知られた一類型を取り上げたい。この話型のあらましは、

a 王(富豪)がたまたま貧家に旅宿をしたおり、その家に男

の子が生まれ、運命の神が「この子は将来王の跡継ぎになる」と予言するのを聞く。

- b 王はこの子を捨てるが、子は人に拾われ育てられる。
- c 王は後に成長した捨て子と再会、この青年に命じて王妃の所へ手紙を届けに行かせる。手紙には「この持参人を直ちに殺せ」としたためてある。旅の途中で出会った人によつて「王女と結婚させよ」とこつそり文面が書き換えられ、青年は王女と結婚する。
- d 王は家来に青年を炉の中に投げ込めと指図するが、偶然王の息子が身代わりになる。
- e 王は青年に悪魔の三本の毛を取りにやらせる。
- f 途次青年は人から三つの質問を託される。
- g 悪魔の妻(母)の助けによつて、青年は悪魔から三つの質問の解答を知り、三本の毛も手に入れる。
- h 帰途、青年はそれぞれに解答を伝え、報酬を得て帰還する。

i 王は青年のまねをしようと出かけ、永遠に戻ることができ

ず、青年は王の跡を継ぐ。

若干の鄙見を述べてみたい。

これは国際的話型からいえば、AT九三〇「予言」とAT四

六一「悪魔のあごひげから三本の毛を取る」が接合したものである。ここでは aからiまで大体備わって語られる話を予言型と呼ぶ。運命の予言、子捨て、己の死の文使いなど前半の要素がなく、後半部分eからiまでの「質問の委託」を核心モチーフとして別個に独立して語られる話もまた非常に多い。これは貧賤の若者が富貴の娘に求婚し、結婚の条件として課された難題を解決するために旅立つのを発端とする型と、不遇の若者が自分の凶運の原因を尋ねに、或いは運命を自ら切り拓くために旅立つのを発端とする型に分けられる。仮に求婚を動機とする前者を難題婚型と、求運を動機とする後者を開運型と呼ぶことにする。

関氏は同論文で古今東西にわたる運命譚の類話百話以上を挙げて考察されているが、中国の事例はやや手薄の感を免れない。私はかつて小文で中國の運命譚を少しく補足したことがあるが、特にAT四六一のタイプの説話が中国において広汎に流布していることは、近年劉守華氏の研究によつていつそう明らかになってきた（1）。本稿はAT九三〇とAT四六一の型の話にしほつて、劉氏の研究を参考にしながら、主に中国において比較的近年に採集された代表的な類話があらためて例示紹介することを主旨とする。あわせてこの説話を關わる問題について、

中国における流傳

まず典型的な予言型である雲南のイ族の「淌來兒」を挙げよう。

狩に出た皇帝が道に迷い、炭焼きの家に泊る。その夜、炭焼きの妻が男児を出産。皇帝は「この子は将来皇帝の女婿となり、皇帝となる」という仙人の言葉を聞く。皇帝は妻を扼殺し、その子をもらい受け、鉄の箱に入れて川に流す。漁師夫婦が拾い上げ、「淌來兒」（流れて来た子の意）と名づけて養育。後に狩の途中でその村に立ち寄った皇帝は、馬に水をやりに来た若者がかつて捨てた子であることを知る。皇帝は若者に妃のもとへ文使いを命ぜる。「この者を直ちに殺せ」の文面。途中廟守の老人が若者が眠っている間に手紙を「娘と結婚させよ」と書き換える。皇帝が宮殿に戻ると、青年は婿となつている。皇帝は青年に太陽姑娘の頭髪三本を取つて来いと命ずる。途次質問の依頼。(a)渡し守からなぜ交代する人がいない(b)若返りの実がなぜ実らない(c)生命の泉がなぜ涸れた。太陽姑娘の家にたどりついた若者は姑娘の母親にかくまれる。母は膝枕で眠る姑娘の毛を一本ずつ抜きながら、夢の話と称して姑娘から解答を引き出す。(a)渡る客が来たら櫂を押し付けろ(b)根の下の蛇を殺せ(c)泉の湧き口にいる蛙を

殺せ。青年は金の毛を携え、解答をそれぞれ伝えて解決し、馬と黄金の謝礼をもらつて帰る。皇帝は若返りの水と果実を手に入れて永遠に皇帝でいたいと出かけ、渡し守から権を押し付けられて永遠に渡し守となる（2）。

これはグリム童話とほぼ完全に一致する。類話として、同じくイ族の「アタの奇遇」、雲南リス族の「太陽の髪の毛をさがしに行く子」、新疆カサフ族の「勇敢なアタ」がある（3）。カサフ族の伝承は、盜賊による手紙の書き換え、巨人の家で主人公が蟻に変えられるといった細部までグリム童話に酷似する。

この予言型はわが国の鹿児島県名瀬市、出水郡、奄美大島、新潟県中魚沼郡にも類話例が見られる（4）。関氏はこの奄美大島の伝承について「最近に、しかもグリムの昔話が口承化したのではないかとも推測される」（関四二）と述べておられるが、少なくとも中国辺境におけるこれら民族の伝承については、グリム童話からの口承化の可能性は考へにくい。ちなみに、中国の近隣ネパールの「少年の運命」も、三つの質問のモチーフを欠くものの予言型である。

子供のない金持ち夫婦が財産を喜捨して男の子を授かる。ある晩、一人の旅人が夫婦の家の戸口に泊まる。神が降臨し赤子が将来この国の王になると予言したことを旅人は知る。旅人はこの話を町中に触れ回り、うわさが国王の耳にも入る。王は家来に命じて子供を盗み出して川に捨てさせる。老婆が拾つて養育。成長した少年に再会。王の命令で死の文使い。

川辺で眠っている少年をお姫様が見かけ一目ぼれし、少年の手紙を姫と結婚させよと書いた手紙とすり替える。少年は姫と結婚。王は靴職人に「王の靴を持って来た者をすぐ殺せ」と指図しておき、少年に靴を届けさせる。靴職人の所へ向かう途中で少年は王子に出会う。王子は「私もちょうどそこへ行くところだから、ついでに靴を持って行ってあげよう」と身代わりになり殺される。王は川に身投げする。少年は国王になる（5）。

この民話では、d 王の息子の身代わりのモチーフが見られる。ところで、実はグリムの第二十九話は第二版以降と初版とでは少し内容が異なる。初版の話は、仕事をしている樵を王女が見初め、二人が相愛となることが発端であり、王が課す難題悪魔の金の頭髪の将来は共通だが、占いの予言、子捨て、手紙の書き換え、渡し守になる王などのモチーフを欠き、質問も四つであり、難題婚型である。第二版以降を予言型の話に差し替えたのである（6）。

次に中国の難題婚型を見てみよう。四川省崇慶県漢族の話例。孤児の作男が地主の娘と愛し合う。主人から粒金、夜明珠、白狐の皮の将来を課される。作男が土地神に相談すると、土地神は西天の仏祖へ聞きに行けと言い、ついでに「自分は勤続四百年だが、どうして出世しないのか、そのわけを聞いて来てくれ」と頼む。途中白狐から千年も修行したのに精になれない、通天河の亀から人間に変れないわけの質問を託され

る。西天の寺に到着し、仏祖にまず三つの質問。その答、欲深の土地神に対しては廟の下に埋めた粒金を捨てよ。白狐には白い皮を脱ぎ捨てよ。亀には甲羅の下の夜明珠を捨てよ。自分の質問の段になると、寺も仏祖も消える。解答を伝えてそれぞれから宝物をもらつて帰つた若者に地主はしぶしぶ娘を嫁にやつた（7）。

この話は質問の原因となる物が即難題物となつてゐる。孤児を背に乗せて通天河を渡してくれる亀については、我々は西天取經の物語『西遊記』中の一挿話を思い出す。三藏法師、孫悟空らを甲羅に乗せて通天河の西岸に渡す老い亀が「一千三百余年も修行を積みましたが、いつ殻から抜け出て人間の身になれるか、仏祖様にお尋ねください」と三藏に依頼する（第四十九回）。だが、経を取つての帰途、一行を背負つて渡河中に三藏が仏祖に聞くのを失念したため言い渋つてゐると、亀は悟つて急に潜つてしまい、三藏らは馬や経もろとも水中に投げ出される（第九十九回）。相互の間に何らかの影響関係があつたかもしない。

浙江省寧海県の「百鳥衣」は、

宰相邸の屋根葺きをしていた左官が、汗拭きの手ぬぐいを手渡してくれた令嬢を見初めて求婚。宰相の難題①龍の珠②鳳の尾羽③金銀で道の上を敷いて嫁迎え。西天の活仏へ。質問④村廟の神、なぜ参拝者がないのか⑤龍、雨を降らせることができない⑥三年間妊娠している嫁、なぜ生れない。活仏

に「質問は三つまで、他人の事はよいが自分の事はだめ」と言われる。解答④地下に埋蔵した金銀を左官にやれ⑤一つある珠の一つを取つて左官にやれ⑥頭から鳳の尾羽を取り。左官は難題を解決して首尾よく結婚したが、一日中嫁と離れず仕事もしない。嫁は自分の絵姿を夫に持たせて仕事に出させる。画像が宮殿まで風に吹き飛ばされる。皇帝はこれを見て妻を後宮に入れようとする。左官は再び西天の活仏のもとへ。活仏は「百鳥山へ行き、鳥たちから羽毛をもらつて百鳥衣を作れば皇帝になれる」と教える。百鳥衣を着た左官は皇帝にこの服を着れば不老長生になると言い、皇帝と服を取り替える。左官は家来に鳥の妖怪を斬首せよと命じる。左官は皇帝になる（8）。

このように、結婚後に絵姿女房型が結合した話も少なくない（9）。

次に開運型を見てみよう。四川省成都の伝承「范丹問仏」、乞食の范丹は毎日少しづつ貯めた米を鼠が盗み食ひしているのを見つける。鼠にどうして米を盗むのだと問うと、鼠が「西天に行き仏祖に聞け」と答える。質問④長者、娘が口をきけない⑤土地菩薩、出世しない⑥亀、昇天できない。仏祖は三件まで答え、あとは口をつぐむ。仏祖の解答④夫となる人に出会えば話せるようになる⑤左右の足下に金と銀を踏んでいるから⑥頭上の夜明珠を取れ。范丹は金銀と夜明珠をもらい、長者の娘と結婚する（10）。

「范丹問仏」の話は四川に広く流布しているばかりでなく、

河南、福建にも分布している（11）。

四川省布拖県のイ族に伝わる「木岬問神」は、

孤児の木岬は貧苦の原因を同居の老人に聞く。老人が「東

方の神に聞け。ついでに李と桃の実がならないわけを聞いて来てくれ」。朝日の方向への旅。質問、老婆から娘の聲喧、ウワバミから頭痛の原因。老人の姿をした神への質問は自分

の事か他人の事かどちらか一方という決まり。解答、樹の下に金と銀の壺、夫に会えば話せる、頭上の砥石を取れば治る。

魔法の砥石を使って冒險をした後、幸福に暮らす（12）

やや変つて継母の虐待を発端とする話もある。例えば、遼寧

省開原県の「旗里西天拝活仏」は、

主人公は継母にいじめられる旗里。仮病の継母が旗里の心臓を食べるしか治らないと夫をそそのかす。父が祖母の家に行くと言つて旗里を連れ出し、途中で心臓を取ろうとするが、追いかけてきた飼犬の心臓を取つて父は帰る。旗里は母がどうして自分の心臓を食べなければ気がすまないのか、そのわけを西天の活仏に尋ねに行く。質問①老人、口がきけない娘

②和尚、修行の甲斐もなく成仏できない③川の中の白鼠、千年修行しても精になれない。解答④貴人に会えば話せる⑤財宝を貯めすぎる⑥耳の中の珠を取り出せ。自分の質問に活仏

は口をつぐむ。財宝と宝珠をもらつて帰つた旗里は老人の娘と結婚。その後父母が乞食となつて旗里の家を訪れ、旗里は

家で孝養を尽くす。父母は悔いて首を吊る（13）。

動物の心臓によつて殺害を命令した者を欺くモチーフがここには見られる。子供の殺害を企てる王や金持ちの役柄をここでは継母が演じてことになる。次の甘肃省榆中県の長い話

「乞丐状元」は、他の要素を加味し、幾分通俗小説風の語り口になつてゐるが、やはり開運型。

江南の金持ちの御曹司張生は占いの見立てに明年三月二七

日に河南で死ぬと出る。乞食をしながら河南へ旅する。道中の墓場で居眠りをしていると、「今日柳長者が娘の病氣のために施餓鬼をするが、行かないか」「今日は来客があるので、お前たち行つてくれ」しばらくして「どうだつた

「長者はあらゆる治療の手を尽くしたが、いつこうに効果がない」「病気は何だ」「娘の耳の中にゲジゲジが住んでいるのだ」という会話を聞く。柳家に赴いた張生は、娘の耳元で薬を熏しげジゲジを出して病を治す。死んでいなかつたら娘と結婚すると約束をする。また旅立ち、廟で雨宿り、女神の金花娘娘の像が雨漏りで濡れているのを柳長者から贈られた宝の傘でさしてやる。天上の金花娘娘が玉帝にこのことを報告し、玉帝は閻魔に命じて張生の寿命を百十二歳に増やしてやる。物乞いの放浪を続ける。質問①異樹が実らぬ②和尚、修行が功を奏さない③禿頭の娘、嫁に行けない。途中ある老人（実は玉帝から下界に遣わされた土地神）に出会い、三つの質問をして答を得る。河南に着いてから三月二七日死ぬ予定

の当日に、張は夢の中で寿命が百十二歳になり、状元に合格すると告げられる。いつも世話になつてゐる張家の夫人にそのことを告げると、張夫人が「息子たちと一緒に勉強しない」と屋敷に住まわせてくれる。張生は状元に合格し、張家の娘と結婚。帰省の道すがら解答を伝える。(a) 果樹の下に埋まつてゐる金の葉三枚を掘り出せ。(b) 堂前の土中の金塊三個を掘り出せ。(c) 頭上に生えている三本の金の髪の毛を抜け。禿頭の娘は急に黒々とした髪の毛が生え、見違えるような美人となる。その娘を嫁にする。金花娘娘の廟に立ち寄り、神像と堂宇の再建のために金塊、金の葉、金の髪の毛を寄進する。二人の夫人を連れ、さらに柳家の娘と結婚し故郷に錦を飾る。その後清官になつた(14)。

百十二歳の寿命を授かり、科挙に及第し、三人の夫人を持ち(重婚は昔の通俗小説や戯曲などでは珍しくない)、役人になつた、まさに福禄寿三拍子揃つた果報者の話である。その中に三つの質問のモチーフが取り込まれており、解答の中に三本の金の髪の毛が出てくる。三本の金(または赤)の頭髪は、難題婚型では主人公に対する金持ちの難題物の一つとしてしばしば現われる。

難題婚型と開運型の一端を見てきたが、この区分は便宜上であり、さほど意味はないであろう。いずれにしても自己の難題、不運や不条理を解決するために主人公は旅に出る。話の眼目は自分の難問を後回しにし、先に他人の難問を問い合わせ解決してやつ

たことによって、解答を得られなかつた己の難題、不条理が必ずと解決されて僥倖に恵まれるという構造にある。仏祖や如来は回答にあたつてしまは「質問は三つまで」とか、「他人事か自分の事かどちらか一方」と念を押し、主人公を迷わせるのが言えない娘、咲かず実らない植物、欲心俗氣が抜けないと成仏できない和尚や出世できない土地神、昇天できず精になれない龍、蛇、亀、鯉など水界の動物、水源の枯渇といつた類であり、そしていずれも主人公が幸せな結婚をし、金銀、呪宝など富を獲得するという結果となる。開運型の場合は娘の聲唾のわけを問う質問がほとんど不可欠の要素となつてゐる。これが主人公の配偶者を備えておく伏線であることは言うまでもない。本来運命譚の基本的テーマは定められた運命に対しても間がいかに抗おうが無力であるというものだが、中国のこれら四六一型の説話は、主人公が自分の不遇に甘んぜず、不幸を宿命とあきらめずに能動的に自ら幸福を希求する、運勢を開拓するという、むしろ運命に逆らう果敢な精神を強調する傾向があるようと思われる。

わが国にも開運型は流布しており、中国と極めて類似している。例えば、徳島県三好郡の昔話「孝行息子と仙人」は、孝行息子が盲目の母を治すために仙人界に向かう道中、娘の長悪い、龍が天に昇れない、ミカンが実らない、の質問を依頼される。

仙人は用件は三つまでに限り、今度出会う人を婿にすれば治る、頭の玉を取れ、ミカンの根元の千両箱を取り出せ、と答える。息子は千両箱をもらい、長者の婿になり、母は玉にさわって目が開く（15）。『日本昔話通観』はこの話を「48三つの質問」に分類して、岩手、山形、新潟、岡山、徳島、佐賀、長崎、熊本、鹿児島、沖縄の材料を収載するが、九州、沖縄に比較的集中して分布していることがわかる（16）。旅立ちの動機は貧乏の原因を探求するものもあるが、母の盲目や妻の病気を治すことを目的とするものもある。果实が実らない或いは花が咲かない、龍や大蛇が昇天できない、娘が口をきけないといった質問とその答も大体共通しており、当然中国との関わりを考えないわけにはいかない。

ところで、劉氏は中国のAT四六一型の民間故事が語り物に取り込まれ改編された例を挙げている。それは「方便美報」と題する善書である。善書は清代初めごろから起こった語り物の一種で、もっぱら因果応報、勸善懲惡を説く。「方便美報」とは人に親切を尽くせば良い報いがある、情けは人の為ならず、の意である。その物語の梗概は次のようである。

時は宋代、落ちぶれた公子王邦賢は財産もなく、結婚もままならず、自分の将来を西天の仏に聞きに旅立つ。途中山賊に囚われるが、山賊の娘蘭英に救われて脱出する。蘭英はついでに父娘の将来の運命を聞いて来てくれと彼に託する。途次趙老人から、娘が口がきけぬわけ、雄鶏が三年鳴かぬわけ、

犬が三年吠えぬわけ、桂花樹が四季通して花を咲かせるわけを託される。また龍からも千年も修練を積んだのに昇天できないわけを託される。仏は託された質問に一々答えてくれたが、自分の質問の段になると、寺院と仏は消える。悲しみ自尽しようすると、白髪の老人が現われ、情けは人のためならず、善行は良い結果となるとなだめられる。帰途、龍には夜明珠を取らせて昇天させ、趙家では、夫に会えば話せる、福星が降臨すれば自然と鶏と犬は鳴く、桂花樹の下に金銀が埋まっているからだと解答を伝え、趙家は王を婿にする。王は夜明珠を朝廷に献上した功績により状元となり、西安の長官に任ぜられ、山賊討伐に赴く。王は山賊に捕まるが、蘭英が逃がしてくれ、そのため蘭英は山から追放される。王は蘭英をさがし当て、仏の答「百の命を救えば、良い報いがある」を伝える。王がちょうど百人目だったので、王と蘭英は結婚。山賊の頭目は死罪を免れたものの、多くの人命を奪つた罪で気が狂い自害する。

劉氏によれば、四川で印刷された木刻本『翼道集』の中に収められたこの「方便美報」は、明らかに『時運宝卷』『西天參仏宝卷』（宝卷も旧時の語り物の一種）から演化したもので、明清時代の面影を残している。そして宝卷、善書など民間の語り物、通俗文芸と民間故事との相互の吸収、影響関係がここに見られる（17）。

我々はこれよりも更に時代を遡つて、予言型の貴重な漢文の

材料として、比較的初期の漢訳仏典『六度集經』中の次の二話を見逃すことができない。

菩薩が貧家に生まれ辻に捨てられる。この日はめでたい日で、野外へ行楽に出かける日。群衆の中にいたバラモン僧が「この日に生まれた子は将来貴く賢い人になるであろう」と予言。それを聞いた、子供のいない長者が召使に捨て子をさせざる。身寄りのない女から辻で拾つた男の子を買い取り、育てる。数ヶ月後、妻が妊娠したので、長者はその子を捨てる。捨て子は羊飼いに拾われ羊の乳で育てられる。長者はこれを知り、また引き取つて育てる。妻が男の子を生んで、また子を往来に捨てる。商人の車を引く牛が子の前で止まる。商人が拾う。身寄りのない女がこの商人からその子をもらい受け育てる。それを知つた長者は大いに反省して、女から子を買い取り、実の子同様に育てる。捨て子は寒子より聰明だつたので、長者は将来弟のほうが使用人にされるかもしれないと心配し、その子をまた山中の竹林に捨てる。子供は自分で脱出し、薪を切る人々（火葬を業とする最下層の賤民カーストか？）に見つけられ養われる。長者はまたこれを知り、引き取る。子供は天賦の才能により、天文学、占い、その他技芸に秀でて、文人や学者が慕い集まってきた。また悪念を起こした長者は配下の鍛冶屋へ「この持參人を炉の中に投げ込み焼き殺せ」の手紙をこの子に届けさせる。途中でゲームに負けている弟に出会い、弟が自分に代わつて相手を負か

してくれと頼み、兄に代わつて手紙を届ける。弟は炉の灰と化す。長者は子に遠い莊園の差配人あてに「石をくくりつけて淵に沈めよ」の手紙を持たせる。子は途中で長者と昵懇のブラマンの家に立ち寄り泊る。そのブラマンの娘がひそかに手紙を「わが親友のブラマンの娘をうちの子に娶わせるよう是非骨折つてくれ」と書き換える。差配はブラマンの娘と若者を結婚させる。これを聞いた長者は病の床に臥す。若者夫婦は孝養を尽くすが、長者は恨みのうちに死ぬ。夫婦は手厚くこれを葬つた（18）。

長者の念の入りようはすさまじく、度重なる子捨て、二度行われる死の文使いなど執拗な殺害の目論見は悉く裏目に出で、偶然に（視点を変えれば逆に必然でもある）弟が身代わりとなり、手紙が書き換えられる。定められた運命の童子に対する長者の抗いは悉く無益であった。「六度」とは涅槃彼岸に達する布施、持戒、忍辱など六種の修行のことで、この説話はその一つ忍辱を主題とする菩薩本生の一話である。迫害され危難の中であつても、恨みや憎しみを持たず、ただひたすら慈悲と忍辱を堅持する菩薩の崇高なる品格が強調されているわけだが、実際に運命の童子の典型例たるを失はない。アールネがつとに『長者とその婿』においてこの話に注目しており、彼は運命の童子型昔話の発生地をインドと推定している。

我々はいま一つ注目に値する漢訳仏典中の故事を持つていだんにきほんる。それは『賢愚經』卷第十一檀膩羈品の中の一挿話である。

長大な話の前半の内容は、貧しいバラモン檀膩羈が次々とさまざま訴訟沙汰を起こし、原告たちと連れ立つて公明正大な国王の所へお裁きを受けに訪ねに行くところまでである。その道中、檀膩羈は国王への三つの質問を委託される。

(a) 樹上の雉が檀膩羈に「どこへ行くのですか」と問う。檀がわけを言うと、「この樹の上で鳴くと良い声が出るのに、ほかの樹の上で鳴くと良くないのです。そのわけを私に代わって国王に聞いてきてください」(b) 毒蛇が「朝穴を出る時は体が柔らかく痛くないのですが、晩に穴に帰る時は体が太くなり痛くて入るのに難儀します。そのわけを」(c) 婦人が「嫁ぎ先にいる時は実家のことが思い出され、実家にいる時は嫁ぎ先を思い出します。そのわけを」。

各訴訟に対する国王の裁きは名裁判といつよりは滑稽でナンセンスな裁判であるが、いずれも双方和解に応じて落着する。ついで実の母と偽の母が子供を争う、所謂兜引き裁判、ソロモン王の裁判が行われる。それから檀はおもむろに依頼された三つの質問を国王に尋ねる。

国王の答「(c) 実家に間男を囲っているから、婚家にいる時は間男を思い、実家にいる時は夫を思うのだ。邪念を捨てなさい。(b) 穴を出る時は心に何の煩惱がなく、身も心も柔軟だから。穴の外では、さまざまな鳥獸に出会い腹を立てているので身が太くなる。穴の外でも心安らかに腹を立てずにいたら難儀はない(a) その樹の下に金の詰まつた壺があるから良い声

が出る。ほかの樹には金の壺がないので良い声が出ない。お前は貧乏だから、その樹の下の金壺を掘り出して持っていくがよい。」檀は国王の解答をそれぞれ伝え、金持ちになり、一生安樂に暮らした(19)。

国王の解答は煩惱からの解脱を説くものである。この檀膩羈の話はもと『ジャータカ』に見える。『ジャータカ』では、アーダーサ・ムカ(鏡面)王子(実はボーディサツダ菩薩の化身)に対し、ガーマニチヤンダという男が一連の訴訟の裁きをお願いしに行く。その途中で、彼は村長、女、僧侶ら、動物、龍王などから計十一の質問を頼まれる。例えば、村長から、昔は財産と名声があつたが、今は貧乏で病氣のわけ。鏡面王子の答賄賂を受け取り正しい裁判をしないから。若い女から、婚家にも実家にも永く居られないわけ。答、婚家と実家の間に愛人がいるから。蛇、出かける時はすぐ穴から出られず、帰りの時はすんなり穴に入れるわけ。答、穴の下の宝の壺に未練と欲があるため。鷗鵠レッキ、ある一つの蟻塚のもとでだけ鳴くことができるわけ。蟻塚の下に宝の壺があるから掘り出せ。龍王、池の水が濁つてしまつたわけ。龍王同士が互いに争つてゐるから。苦行僧、公園の果実が甘くなつたわけ。不正な生活をしているから、といった類で、これも力点はやはり煩惱からの解脱、不正への戒めを説く鏡面王子の解答にある(20)。現代のインドの民話にもこのタイプが伝承されているようである。例えば、インド最北部のジャンム・カシミールの「眠つてゐるカルム」

は、

海のはるか彼方に眠つてゐる自分のカルム（運勢のこと）を見つけに出立した男に、質問①マンゴーの木、誰も実を採つて食べてくれない②二つの井戸、誰も飲もうとしない③母牛、ひどく子牛に打たれる④羊飼い、神様が私のことを知つているか⑤大蛇、なぜ蛇の姿になつたのか。男は蛇の助けを借りて海を渡り、眠つてゐる自分のカルムを起こす。また、それぞれのカルムから答を得る。⑥前世で博学な人間であつたが、その学識を誰にも分かつたから⑦前世でバラモンの母と娘であつたが、誰にも施しをしなかつたから⑧母牛の前世は現世の子牛の子供で、同じように母にひどい仕打ちをしていたから⑨前世でよく施しをし、神を敬つていたから神は決して忘れない⑩前世で守銭奴であったから（日本民話の会：一四四一—一四七）。

この話も、最後に男は帰つてから幸せで豊かな生涯を送つたと語るが、前世の悪業が現世に災いするというカルムの説論に眼目が置かれている。ともあれ、中国の三つの質問型の話群とこれらインドの話とは全く接点がなく無縁であるとはいひ難いであろう。

結び

最後に、予言型運命譚に関する問題は大きく多岐にわたり、

複雑であるが、今後考究されるべき課題の所在を指摘しておきたい。第一は発祥地と伝播の問題。すでに明らかのように、この物語はユーラシア大陸の東西にわたつて、しかもかなりの一一致性を持つて流傳している。なぜかくも広範囲に伝えられるのであらうか。どのように伝播、普及したのであらうか。これは一つの大きな謎である。ブレードニヒのヨーロッパにおける運命説話に関する詳細な研究などを参考にすると、AT九三〇とAT四六一が結合した予言型の話はヨーロッパの東寄りに偏して比較的の稠密に分布しているようと思われる。具体的に言えば、クロアチア東部、スラヴォニアのセルビア人とクロアチア人、チエコ人、スロヴァキア人、ラトヴィア人などの間に完全な形の予言型が伝わつてゐるし（ブレードニヒ八八一九二）、十九世紀ヴィリストキが採集報告したルーマニア、トランシルヴァニアのロマ人（ジプシー）のメルヘンにも典型例が見られる（21）。ロシア、アルバニアにも伝承されている（22）。このことは恐らくこの話の発生、伝播の問題と関わるであろう。エバーハルトは「近東と中国の昔話研究」において、四六一型の昔話は近東のイランに発源し、十五世紀に海上経由で中国東南沿海に伝入したという仮説を提出した。この説に対し、劉氏は、当時彼は中国沿海地方の昔話しか知らず、中國内陸部の類話の存在を知らなかつたのだから、この説は成り立たないと反駁している。更に劉氏は、中国の四六一型昔話は太陽を追い、太陽神の加護を求める中国古代特に楚地方の太陽神話に淵源し

ており、その後十三世紀モンゴル帝国成立にともなつて、中国、アジアから欧洲に伝播し融合したと主張する。

二つめは運命譚と帝王伝説、英雄神話との関係性、類縁性の問題である。我々はこの民間の昔話を固有の帝王の伝説にそつくり移植したと思われる例を知つている。それは十一世紀中世ドイツ、コンラドウス帝の位を継いだハインリヒ三世にまつわる伝説である。この伝説は悪魔の金髪将来のファンタジーこそないが、狩での仮泊、神の予言「子捨て、捨て子との再会、死の文使い、手紙の書き換え、王女との結婚のモチーフを全て備えており、婚礼後に真相を知ったコンラドウス帝は神のお告げには抗うことができないと悟り、若者を正式に後継者として認めた。この子がハインリヒ三世であると伝える（23）。現代にお口承されているカナダのモーゼ伝説「小さなモーゼ」などはまさしくグリム童話の焼き直しであり、ヘロデ王は今も渡し船を漕いでいると語る（日本民話の会三五一四二）。古く聖書「出エジプト記」に見えるモーゼ物語がかくも尾ひれを付け膨らませて語り継がれている例である。英雄誕生と生い立ちの神話群の中から、我々は格好の例を幾つか挙げることができる。例えば、古代イラン、アケメネス朝ペルシャ帝国の創立者キュロス王の伝説、古代ギリシャ人に伝えられたバビロン王ギルガモス（ギルガメシュ）の伝説。ヘロドトスの『歴史』に記録されたキュロス伝説は名高い。アステュアゲス王の孫キユロスは生まれる前から祖父に代わって王になると予言されていた。キ

ユロスは捨てられるが、牛飼いに育てられ、後にアステュアゲスは少年となつたキユロスに再会する。結局キユロスはペルシヤ人を率いてアステュアゲス王を打ち倒し、予言は実現する。ギルガモスも生まれる前から祖父のバビロン王国を奪うであろうと予言され、赤子の時に城の塔から投げ落とされるが、鷺が翼の上で受けとめる。庭番に養育されたギルガモスは後に果たしてバビロンの王となる。これら帝王、英雄伝説の骨格に貫かれている、父王殺し或いは王権篡奪の神託、申し子に対する遺棄や殺害の試みの失敗、予言の成就といった神話的モチーフが運命譚になお受け継がれていると見ることができる。

注

- (1) 劉著『比較故事学』中の第一章「一個著名故事的生活史探索」に収められた一連の論文四篇がこの話型を論じている。劉氏は八〇年代以降、中国の四六一型の話を新たに九〇篇以上発見し、うち湖北省だけでも二十余篇を数えると言う（同書四九二頁）。
- (2) 『雲南民族民間故事選』雲南人民出版社、一九六〇年、六一一六七頁。『彝族民間故事選』上海文芸出版社、一九八〇年、二五〇一一五六頁。
- (3) 一族「阿達的奇遇」「山茶」一九八七年四期、四一八頁、一四頁。リス族「尋找太陽頭髮的小孩」「山茶」一九八三年四期、四二一四六頁。「尋找太陽頭髮的故事」「傈僳

族民間故事選』上海文藝出版社、一九八五年、三〇—三八頁。カサフ族「勇敢的阿達」『民間文学』一九五六年五月号、四八—五四頁。

訳『苗族民話集』平凡社、一九七四年、一七一—一八四頁「みなし」と乙姫」など。

(4) 『日本昔話大成』第7巻、二四二—一四七頁「太陽の三本の毛」、三〇三—三〇五頁「炭焼き五郎の話」。同上第3巻、一八七頁「産神問答・炭焼きの子型」参照。

(5) 茂市久美子著『ヒマラヤの民話をたずねて』白水社、一九八二年、一一八—一二三頁。

(6) 吉原高志、吉原素子訳『初版グリム童話集』白水社、一九九七年、一四七—一五三頁「三本の金の髪の毛をもつ悪魔の話」参照。

(7) 『中國民間故事集成四川卷(上)』中国ISBN中心、一九九八年、五一八—五一九頁「附・異文」。

(8) 『中國民間故事集成浙江卷』中国ISBN中心、一九九七年、六二六—六二七頁。

(9) 例えば、同じく浙江省新市の「宝探しの左官屋」、澤田瑞穂訳『中国の昔話』三弥井書店、一九七五年、一三四一四二頁。河南省桐柏県『中國民間故事集成河南卷』

二〇〇一年、三九九—四〇一頁「附・異文」。甘肃省定西県『中國民間故事集成甘肅卷』二〇〇一年、四五三—四五六頁「微小和鳳仙」。『甘肅卷』には同型の話が続けてあと二話見える。ミヤオ族「孤児和龍女」『苗族民間故事選』人民文学出版社、一九六三年、村松一弥編

『中國民間故事集成四川卷(上)』五一六—五一八頁。

(10) 例えれば、河南省鎮平県『中國民間故事集成河南卷』二〇〇一年、三九六—四〇一頁「范丹問仏」。福建省建陽県『中國民間故事集成福建卷』一九九八年、五三二—五三四頁「范丹尋如來」。

(11) 『中國民間故事集成四川卷(下)』八七三—八七七頁。

(12) 『中國民間故事集成遼寧卷』一九九四年、四八八—四九一頁。主人公を斎礼(旗里と同音)とする同じ話が吉林公司、一九九二年、五五二—五五四頁「附・異文(一)」にも伝わる。『中國民間故事集成吉林卷』中国文聯出版

(13) 『中國民間故事集成遼寧卷』一九九四年、四八八—四九一頁。主人公を斎礼(旗里と同音)とする同じ話が吉林公司、一九九二年、五五二—五五四頁「附・異文(二)」。

(14) 『中國民間故事集成甘肅卷』四六〇—四六六頁。

(15) 『日本昔話通観第21巻徳島・香川』同朋舎出版、一九七八年、三五〇—三五四頁。

(16) 『日本昔話通観第28巻昔話タイプ・インデックス』同朋舎出版、一九八八年、一二五—二五二頁△資料篇△に挙げられた各卷を参照されたい。

(17) 劉守華著『中國民間故事史』湖北教育出版社、一九九九年、五五九—五六二頁。

(18) 吳、康僧会訳『六度集經』卷第五、『大正新脩大藏經』第三卷本縁部上。蒲正信注『六度集經』巴蜀書社、二〇〇一年、一八五—一九〇頁(四十五童子本生(四姓害子))。

康僧会（?-一一八〇）は先祖が康居の人。康居はイラン系ソグド人の住地ソグディアナ、今のウズベキスタンのサマルカンド。彼は赤烏十年（一一四七）に交趾（広東広西及びベトナム北部地方）から吳の建業（南京）に来た。

(19) 『大正新脩大藏經』第四巻本縁部下。『賢愚經』は元魏時代（三八六—五三四）に僧慧観らが高昌郡（今の新疆トルファン）で漢訳したもの。

(20) 中村元監修・補註『ジャータカ全集3』春秋社、一九八一年、一八八一—一九九頁。「第二五七話ガーマニチャヤンダ前世物語」。

(21) ハインリヒ・フォン・ヴリスロキ著、浜本隆志編訳『ジアシー』の伝説とメルヘン』明石書店、一一〇〇一年、五〇一六一頁「太陽の王」と「日本の金髪」。

(22) アファナシエフ編、中村喜和編訳『ロシア民話集（下）』岩波文庫、一九八七年、一九一—二〇五頁「金持ちマルコと不幸者ワシリイ」。巻末の注によれば、この民話はリージェゴロド県で採録され、原書には類話が三篇あるという。小沢俊夫編『世界の民話4 東欧I』[※] ようせい、一九七七年、一九六一—二〇四頁「領主と若者」。但しのアルバニアの民話は質問の委託の要素を欠く。

(23) ヤコブス・デ・ウォラギネ著、前田敬作、山中知子訳『黄金伝説』第四冊、人文書院、一九八七年、四二一七—四二一八頁。

引用・参考文献

Antti Aarne:Der reiche Mann und sein Schwiegersohn.

Vergleichende Märchenforschungen,Helsinki,FFC23,1916
オットー・ハック著、野田倬訳『英雄誕生の神話』人文書院、一九八六年

金榮華『民間故事論集』「從印度佛教到中國民間—《賢愚經·檀膩羈品》故事試探」台北・三民書局、一九九七年

鈴木健之「閔敬吾氏「運命譚」補遺」『學芸国語国文学』第十九号、一九八四年
関敬吾「運命譚—その系統と分布—」『成城大学民俗学研究所紀要』第六集、一九八一年

日本民話の会・外国民話研究会編訳『世界の運命と予言の民話』三・弥井書店、一一〇〇一年

ブレームヒ著、竹原威滋訳『運命の女神—その説話と民間信仰』白水社、一九八九年
劉守華著『比較故事学』上海文藝出版社、一九九五年

Václav Tille:Das Märchen von Schicksalskind,in:Zeitschrift für Volkskunde 29,Berlin,1919
Wolfram Eberhard:Studies of Near Eastern and Chinese Folktales,Sinologica 1,1947

（ヤコモ・だけし／東京学芸大学）